

中学校の英語教育における 絵本・児童文学の活用

白 須 康 子

I. はじめに

近年、小学生や幼児の英語教育が盛んになっている中で、中学校では平成14年度から新しい学習指導要領が施行されている。外国語学習の目標として掲げられているのは、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」(学習指導要領 p.88) ことである。リスニングとスピーキングに重点を置いた目標となっているが、本稿では敢えてリーディングに焦点を絞って、中学校レベルの英語学習者のために英語で書かれた絵本や児童文学を活用することの意義について探してみたい。

言語習得のために必要な4つの技能はお互いに密接に関連しているので、話すこと・書くことといった生産的な言語活動の能力を向上させるためには、聞くこと・読むことによる大量のインプットがどうしても必要である。リーディング教材の素材となるものは会話・手紙・説明文などがあり、もちろん学習者はいろいろなスタイルの違った読み物に接することが必要であるが、本稿で用いる絵本・児童文学という用語は童謡や読書の楽しみを味わうための物語に限定し、単に知識を得るための本は除外する。英語で

書かれた絵本や児童文学を通してリーディングの能力を養うことは、言語面でコミュニケーション能力の養成につながることは言うまでもなく、その他にも異文化理解や、更には人間の教育といった側面においても波及効果が期待できると考えられる。中学生は年齢的に13歳から15歳という思春期にあることや、彼らが英語の初級学習者であること等を考慮しながら、なぜ絵本・児童文学をリーディング用補助教材として利用することが意義のあることなのか、そして具体的にどのような本を利用すれば効果的であるかについて考察する。

Ⅱ. 学習指導要領と教科書

(1) 学習指導要領の内容

新しい中学校学習指導要領に規定されている外国語（英語）の各項目のうち、リーディングに関するものを中心に要点をまとめてみると次のようになる。

まず、目標は「英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする」(p.88) こととなっている。初歩的な英語とは語彙の面で別表に示されている冠詞・前置詞・助動詞など基本100語を含めて900語程度までの語と、基本的な連語及び慣用表現を使って書かれ、文法的には文法事項の項目に具体的に提示されている文型その他の基礎的な文法事項を含んだ文で構成されているものを指す。教科書の出版社によって基本語以外のどの単語を中学生が学ぶべきものとして選択するかにはばらつきがあるため、『ジーニアス英和辞典第3版』では約1100語が中学学習語として掲載されている。

次に「読む」という言語活動には「黙読」と「音読」の両方が含まれ、教材が物語や説明文である場合は、大意や要点を読み取ることができるよ

うに指導することになっている。指導計画の作成に当たっては、辞書の初歩的な使い方や活用のしかたを指導することが盛り込まれている。そして、教材を選ぶ際には「英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するもののうちから、生徒の心身の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げる」(p.95) ようにし、それらが次の3点において、学習者にとって有益であるよう配慮するとされている。

1. 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てる。
2. 世界やわが国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てる。
3. 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養う。

以上3点と上述の教材の5つのジャンルを合わせて考える時、これら3つの観点を同時に達成できるものとして「物語」の果たす役割は特に大きいと思われる。なぜならば、物語を読むという行為には読者が直接その物語にかかわっていくという姿勢が伴い、それが海外の物語であれば、その国の文化や社会などに関する情報がストーリーの展開の中に自然に織り込まれている上、優れた作品は国や人種を超えた人間にとって普遍的なテーマを扱っているからである。

(2) 教科書のリーディング教材

中学生はどのような形で初歩的な英語で書かれた読み物に接しているのだろうか。平成14年に検定済み教科書として7つの出版社から発行された英語のテキスト21冊(各出版社から学年別に3冊ずつ)に関して、説明文

や物語などの形式で、ある程度まとまった量の英文を読ませるように工夫してある課を中心に調べてみたところ、以下のような傾向があることがわかった。

まず、7社中6社が通常のレッスンの他に特別なリーディング用の課を設けており、当然のことながら学年が上がるにつれて語数が増加して長くなる。1年生用は約100語から200語、2年生は150語から400語、3年生になると300語から600語程度の長さである。

次に、教材の内容が世界のどの地域を扱っているかに注目すると、学習指導要領に提示されているように、アメリカ、イギリス、オーストラリアなど英語圏が舞台になっているものが最も多く、次いでアジア、ヨーロッパ等を含めた世界各地の人々にスポットライトを当てたもの、日本や日本人の話題を取り上げたものと続き、各教科書ともこれらがバランスよく盛り込まれている。

更に6社の教科書に設定されているリーディング用の各レッスンを、ある物事について論理的に具体例を挙げたりしながら説明していくタイプのものか、それともストーリー性を持った文学のジャンルに属するものかによって分類すると、ほぼ1対1の割合でバランスのとれた配分になっている。説明文型のレッスンのトピックを見てみると、大まかに地球環境の問題を扱っているもの、戦争と平和、動物愛護、世界各地の民族や文化について、その他に分類できる。一方、物語型の方は日本を含めた世界各地の民話や昔話を教科書用にやさしく再話したものが最も多く、*Fly Away Home* など最近の映画のスク립トをベースにしたもの、『葉っぱのフレディー：いのちのたび』として日本語に翻訳されて話題になった *The Fall of Freddie the Leaf* をもとに簡単な英語で書き直したものの他、劇や伝記といったジャンルのものも含まれている。

以上概観したように、英語の教科書は多くの中学生にとって初めて接する英語の本であり、学習指導要領に示されている初歩的な語彙や文法事項を段階的に習得し、異文化理解や言語に対する関心を深めながら、実践的なコミュニケーション能力を伸ばすことができるように編成されている。しかし、学校で使用する教科書に収められているリーディング用教材の場合は、語彙や文法に多くの制限がある。そのため原作を削ってかなり短くするか、あるいはごく一部のみを抜粋して使うだけでなく、単語や文法を単純なものに置き換えたりする結果、大筋は生かされていても原作とは大分かけ離れたものになっているのが普通である。そこで、補助教材として使用するリーディング教材は教科書ほど制限にこだわらず、しかし明確な基準に従って注意深く選択された素材をできるだけ原書で提示し、初級学習者にも生の英語に触れさせることが必要ではないだろうか。

Ⅲ. 言語教育と絵本・児童文学

外国語学習に目標言語で書かれた文学作品を導入する試みの歴史は長い。以前は文学と言えれば大人の文学を指すことが多かった。ところが、最近では学習者の年齢に関係なく、子どものために書かれた文学作品をリーディング教材として積極的に採り入れる動きがあり (Hill, 1986 ; Bassnet と Grundy, 1993)、特にアメリカ、カナダ、オーストラリアでは第2言語としての英語 (ESL) の授業で児童文学が使用されることが定着してきている。そこで、なぜ絵本や児童文学が言語学習に有益なのかその理由を先行文献に探してみる。

児童文学を語学教育に導入した場合、個人的なかかわりあい刺激するという文学としての役割に何よりも重点を置きながら、その他のメリット、

特に学習者の言語及び文化に関する知識への永続的で有益な影響を主張するのは Collie と Slater (1987) である。

一方、Ghosn (2002) は初歩から一歩ずつ積み上げていくボトム・アップ方式の英語教育に対し、児童文学をそれに替わるものとして提唱している。彼女は小学校の英語教育に本物の文学を用いることがなぜ良いかの理由を4つ挙げているが、そのうち (1) 動機付け、(2) 言語学習、(3) 変化の媒体としての文学、についてその内容をもう少し詳しく紹介する。

まず「動機付け」とは、子どもが物語に自然に引き付けられるという習性を利用して、語学学習の授業に本物の文学を使うことによって、子どもたちにやる気を起こさせるという意味で意義のある状況を作り出すことができる、というものである。確かに小学校の子どもたちはまだお話の読み聞かせを楽しむ年代であるから、この理由は小学生には当てはまるが、本稿で扱っている中学生には必ずしも当てはまらない。この年齢層の学習者には何が動機付けになるのだろうか。

十代の英語学習者に児童文学を利用することの必要性を述べているのは、フィンランドの Rönngvist と Sell (1994) である。フィンランドでは十代の学生用の教科書と言えば正統派古典の簡約版が定番であるが、ティーンエイジャーの若者たちには彼らの世代に合ったジャンルやテーマ、プロットを持つ十代の若者向けに書かれた本を利用すべきで、実際彼らはそのような本を好むし、理解したがると報告している。更に、異文化理解の観点からも伝統的な教科書よりも十代向けの児童文学の方が、目標文化をより幅広く、深く理解することを促すことにも言及している。

Ghosn の挙げた2つ目の理由「言語学習」に戻ろう。文学がどのような点で言語学習に貢献するかについて、彼女は文学は自然な言語、最も洗練された言語を提示するので、文脈の中で語彙を発達させることを助けること、上述の Collie と Slater (1987) も指摘しているように文学は言葉を口

にすることを刺激し、子どもをテキストに関わらせるので、言語教育におけるトップ・ダウン方式のための優れた媒体になりうることの2点に触れている。日本の場合は学校の英語教育の現場では検定済みの教科書を使用することが義務付けられているため、Ghosnの提案するトップ・ダウン方式を全面的に採用することは無理にしても、補助教材として児童文学を利用することの言語学習上のメリットは大きいであろう。

そして、3番目の理由「変化の媒体としての文学」とは、優れた文学は子どもの情緒の発達を促し、人と人との関係や異文化に接するときの建設的な態度を育成するという機能を果たすことである。この点に関しては学習者の年齢は関係ない。児童であろうと、青年であろうと、成人であろうと、文学はその読者の内面に何か質的な変化を起こさせるものである。

さて、もうひとつ今まで見てきたよりも少し年齢層の高い成人の英語教育に絵本と児童文学を導入した実践報告がHo (2000) によってなされている。対象となった学生は中華人民共和国出身の平均年齢19歳のEFL (外国語としての英語) の留学生である。この研究によると彼らはすでに成人で子どもを対象とした本を読む年齢層ではないが、絵本や高学年の子ども向けの短編の物語をリーディング教材として導入したところ、まず絵本は中国人の英語学習者にとって発音するのが難しい英語の音の発音訓練に特に効果的で、学生たちも通常の発音練習用のドリル教材よりも楽しく学ぶことができたそうである。また児童文学はプロット、テーマ、性格描写の面で学生にとって興味深く、言葉も筋も簡単なため読解が容易で、彼らが英語を使う自信をつけることができたと報告されている。そして、このグループの学生が最も興味を示したのは、彼らが主人公と一体化できるヤング・アダルトが主人公になっている小説である。この実践報告例から、絵本や児童文学はそれらがターゲットとしている実際の読者層よりも年齢的

に高い成人の学習者にとっても有益で、興味を起こさせる教材になりうる
ことがわかる。

これらの先行研究と、すでに見た学習指導要領の内容及び教科書の現状
を考え合わせると、英語圏の絵本・児童文学を日本の中学校における英語
教育に活用することは、(1) 言語習得、(2) 異文化理解、(3) 文学的価値
の3つの観点から有用性があると考えられる。そこで、これら3点につい
て以下に詳しく述べる。

IV. 日本の英語教育になぜ絵本・児童文学が有益か

(1) 言語習得上の利点

中学生が英語を習得する過程で、原書のまま一切手を加えられていない
絵本や児童文学を読むことは、具体的にどのような言語習得上の利点があ
るだろうか。

第一に考えられるのは、教科書用に語彙や文法、長さを制限されたやや
人工的で断片的な英語の読み物ではなく、文学的に質の高い自然な英語で
書かれた、ひとまとまりの完成された物語を体験する機会を得ることがで
きることである。すでに述べたように、Buscaglia (1982) の *The Fall of
Freddie the Leaf* は2つの出版社から出ている1年生と3年生用の教科書
にリーディング教材として入っている。この自然と生命のサイクルをテー
マとした絵本の原作は本文が1300語ほどの話であるが、A社の場合はその
3分の1の約420語に、B社は8分の1のわずか170語に削られてしまっ
ている。中学生の教科書に載っている読み物は長くても600語程度であるか
ら、この物語の原作はその2倍以上の長さだが、教科書用にこれほど短く
要約して書き直す必要があるのだろうか。

そこで、語彙に関してこの物語を分析した結果、全部で400語以下のボキャブラリーがあれば読める本で、この中には中学校で学習する語が約300語含まれていることがわかった。ということは、中学学習語900語のうち3分の1を知っていれば、辞書に頼らなくてもこの物語の大部分は理解できるはずである。文法的にも、中学校で学習する時制のうち過去形、現在完了形、現在進行形、助動詞や疑問詞で始まる疑問文、受け身、関係代名詞、比較などが含まれているほか、基本的な文型を使って、全体的に簡潔な文で所々に繰り返しの表現を用いて書かれており、必要な注を与えられれば中学生にも原作のまま読める本である。

そして何よりも、春から夏へ、秋冬へという美しくも厳しい季節の移り変わりの中で繰り返されるこの死と再生のドラマは、葉っぱのフレディーと老賢人的な存在である長老格のダニエルの交わす哲学的な会話を通してイメージ豊かに語られている。生命をテーマにした、このような物語を原書で読んで感動体験を得ることは、中学生にとって英語を通して何かを学ぶという意味でも重要であると思われる。

次に絵本というメディアに注目して、その言語習得上の利点を考えてみよう。絵本はまだ自分で文字を読むことのできない幼い子どものために大人が読み聞かせをすることを念頭において書かれた作品が多く、耳で聞いて理解しやすく、しかも快い響きとリズムを持っている。それゆえ、絵本は学習者が楽しみながら英語特有の発音やリズムを身につけるのに適した教材であることは、Ho (2000) の報告からも明らかである。しかも、童謡や昔話を素材としたものは繰り返しの表現が多く、語彙や表現を定着させるのにも効果的である。

それからもう一つ絵本に関して重要な点は、挿絵や写真が話の内容理解を助けてくれることである。ただし、この点について松岡 (1985) が「昔

話絵本が昔話から奪うもの」のひとつとして指摘しているように、ことばで語られた物語からは受け手が想像力を働かせて、それぞれ独自のイメージを思い描くことができるが、それが絵本になると画家のイメージを受け取ることになってしまうという問題点があることを心に留めておき、絵本を教材として選択する際には、文と絵のバランス、挿絵から読者が受けるイメージにも十分に考慮する必要がある。

一方、英語で書かれた児童文学を英語の授業に導入することの利点は、動機付けである。13～15歳という年齢の中学生にとって、海外の十歳前後からティーンエイジャーの子どもを主人公とした児童文学は、まさに彼らと同世代の子どものために書かれたものである。中学生が英語の児童文学を読むことは、英語の絵本を読むよりも語彙や長さの点ではるかに努力を要するが、十代の自分たちに興味や関心のあるテーマを扱っていることで、読んでみたいという気持ちを起こさせることができる。

学習指導要領でも「読む」という言語活動の指導事項のひとつに、物語などのあらすじや要点を読み取ることが挙げられているように、あまり細部にこだわらずに大意を把握しながら読み進めていく能力を中学生は身につけなくてはならない。そのためには、リーディング教材が彼らの学習意欲をそそるような内容で、いざ読み始めるとストーリーの展開の面白さに引きずられて自発的に読み進めることができるようなものであれば、学習効果も高くなると思われる。そのような読み方ができるようになれば、文脈から未知の単語の意味を推測したりすることなども可能になる。

もちろん英語圏の子どもに人気のある児童文学作品が、どれでも外国語として英語を学習している日本の中学生に適切であるとは言えない。言語の観点から教材を選択するときに考慮すべき点は、俗語や非常にくだけた口語表現があまり使われておらず、文法的にも簡潔でスタンダードな英語

で書かれているかどうか、中学学習語以外の語彙が多すぎないかどうか、ストーリーの長さが長すぎないかどうかなどである。以上を考え合わせると、とりあえず量的に無理のない短編から入っていくのが良いであろう。短編でも一つのまとまりのあるストーリーを完読することによって達成感を味わうことができるからである。

(2) 異文化理解教育の一環として

学習指導要領に教材を選択する時に考慮すべき観点として、異文化理解（日本の文化も含めて）と国際理解が挙げられていることはすでに確認したが、この2つの違いについて小池（1994：28）は「異文化理解はひとつの文化と他の文化を対等の立場で比較し、相互の理解を進めようとする態度であるのに対して、国際理解はそのことを含みながらも、広範囲な地域を包み込んだ理解をするという意味を持っている」と説明しながらも、実際には同じものに対する視点の相違と解釈し、外国語教育を異文化理解教育に含まれるさまざまな分野のひとつとして位置づけている。

外国語教育において目標言語が話されている国の文化を教えることの重要性がクローズアップされるようになったのは1960年頃からである。Brooks（1964）は外国語の授業で文化に関する話題を提示する時の視点は、若い学生という立場の人の視点であるべきで、観点は彼らが日々の課業をこなしていく時の観点でなければならないと述べ、言語のクラスで話題として取り上げられる項目の詳しいリストを作成した。更にBrooks（1968：210）は文化を「人々の行為のうち最上のものとして際立つもの、人々が行い、考え、信じることのすべて」と定義した上で、文化を「生物学的成長」「個人的洗練」「文学と芸術」「生活のパターン」「生活様式の総計」の5つのカテゴリーに分類した。

一方、外国語教育を通じて伸ばすことのできる文化に関するスキルを提示したのは Nostrand と Nostrand (1970) で、それを基に Seelye (1974: 7) は文化について教える際の7つのゴールを設定した。例えば以下のようなゴールである。

ゴール2：言語と社会的変数の相互関係：学生は年齢、性別、社会階級および居住地のような社会的変数が人々の話し方や行動のしかたに影響を及ぼすことを理解する。

ゴール4：語や句の文化的含蓄：学生は目標言語の最もありふれた語や句にさえ、文化的に条件付けされたイメージが結びついていることを認識する。

ゴール7：他の社会に対する態度：学生は目標文化に対する知的好奇心と、その人々に対する共感を示す。

その後、Byram (1989) は言語と文化を教えるための理論的モデルを、円を4等分した図を使って示している。4つの構成要素は(1)言語活動、(2)言語認識、(3)文化認識、(4)文化経験である。(1)は言語を習得するというスキル志向であるのに対し、その他はすべて知識志向である。また、(1)と(4)は外国語を媒体として行われるが、(2)と(3)は母国語が使用される。そして、それぞれ焦点となるのは(1)では外国語、(2)と(3)は比較、(4)は外国の文化である。

さてここで、文化は「文学」を通して教えることができるかという問題であるが、1960年代から1970年代にかけては言語学的立場から否定的な見方が大勢を占めていた。それでも、Marquardt (1967) や McKay (1982) は早くから積極的に文学の有用性を主張し、現在では特にESL用のリーディング教材として文学を使用することは一般化している。

Valdes (1986) は中級の上から上級のESLの学生にアメリカの小説、

ドラマ、詩、エッセイを使ってアメリカ文化を教える際のポイントとして、アメリカ人特有の価値観、例えば自立、競争とフェア・プレイの精神、更にユーモアの話題などを取り上げることを提案している。また、どのような順序で作品を読んでいくかについては、年代順、テーマ別が良いとしており、ジャンル別という配列はいろいろなジャンルの作品を取り混ぜることによって生じる多様性を犠牲にしてしまうという理由であまり薦めていない。

このように言語教育には文化の側面が不可欠であること、文化を教える素材として文学が定着していることを確認したところで、今度は外国語として英語を学ぶ日本の中学生にとって英語圏の絵本や児童文学は、どのような異文化理解の機会を提供するか考えてみよう。

まず、昔話や伝承童謡など世代を超えて語り継がれてきた物語や歌はいわゆる基層（下層）文化に属し、それは上層文化、中間層文化と異なり時代の変化に左右されることなく、ある文化圏で育った人々が自然に身につけ無自覚のまま共有している文化である（絵本・児童文学研究センター編、2002）。それは正に文化のルーツとも言えるもので、その文化圏の人々の世界観や言語生活と深いつながりがある。その意味で昔話などの基層文化を学ぶことは、その文化の中で生活する人々の心の根っこの部分に直接接触れることになる。伝承童謡は文章の中で引用されたり、歌の歌詞に登場したり、あるいはパロディーの材料として頻繁に使われてきたし、現代でもそうである。また、昔話の中にはよく似た類型の話が異なる文化圏にまたがって伝播しているものがあり、そのことに気付くことによって人間が人種や民族の違いにかかわらず共通して持っている普遍的な人間性について考えることもできる。自分の文化と他の文化を比較して、自他の違いを認識することも重要であるが、共通項を見出すことも同様に重要である。

子どものための文学は19世紀中葉から20世紀初頭にかけてイギリスを中心に第一の黄金時代を迎えた。その後2つの世界大戦を経て疲弊したヨーロッパからアメリカへ絵本・児童文学の中心が移り、そこから更にカナダ、オーストラリア、ニュージーランドへと波及して今日に至っている。現在では主要な英語圏の国々において児童書の出版が盛んで内容も充実してきている。一口に西洋と言っても例えばアメリカとイギリスでは文化的な共通点があるにもかかわらず、多くの点でこれら2つの国は異なっているので、アメリカはアメリカの文学を通して、イギリスはイギリスの文学を通してそれぞれの国の文化について学ぶのが理想的である。その意味で英語圏の児童文学は日本の子どもたちに、それぞれの国の作家によって書かれた作品を直接、生の素材として異文化を学ぶ機会を与えてくれるのである。

また、物語のジャンルもファンタジーからリアリズムまで豊富で、冒険物語、学校物語、自己発見物語などいろいろある。1970年代以降思春期の子どもや十代後半のヤング・アダルトを対象とした作品も数多く書かれるようになった。このような状況なので、異文化理解に役立つと思われる素材の選択の幅は広く、子どもたちは物語を楽しみながら、同時に異なる文化についての知識を身につけ、感動体験を通して異文化への理解を深めることができる。

(3) 文学としての価値

さて、ここまで英語教育における言語習得と異文化理解の観点から英語圏の絵本・児童文学の有用性について見てきたが、次にもう少し一般的な教育の視点からそれらの文学としての価値について考えてみたい。

ヨーロッパの子どもの本の文化は、17世紀中頃のコメニウスに始まる近代教育理論と密接に結びつきながら発展してきたという歴史がある。近代

教育理論の根幹を成す考え方は、子ども（幼児）の視覚や聴覚等の外部感覚を研ぎ澄ます教育を行うことによって、子どもの対象物に対する観察力が高まり感動体験を持つ、その結果、子どもの内部感覚が活性化されるというものである（絵本・児童文学研究センター編、2002）。子どものための絵本はそのような子どもの鋭い観察力に耐えられる、高度で芸術的なものを作ろうという目的意識を持って作成されてきた。この伝統は児童文学にも引き継がれ、フランスの比較文学者 Hazard (1947 : 42) は子どもにとって良い本とはどのような本かというリストの中で、第一に挙げているのが「まさに芸術の本質に忠実な本」である。Smith (1953) や Egoff (1980) は子どもの本について評価する時に、大人の文学と同じものさしで測ることを強く訴えている。Townsend (1996 : vi) も「ちょうど子どもが人類の一部であるように、子どもの本も文学の一部である。子どもにとって良い本はそれ自体でよい本でなければならない。」と述べている。

このような伝統を持つ絵本や児童文学には、ただ単に英語教材として言語習得や異文化理解を助けるだけではなく、文学としての価値があることも忘れてはならない。Chambers (1983 : 27) は人間にとって文学が必要な理由を、文学は人の態度と認識の両方に働きかけ、そのどちらもが行動へとつながる、つまり「文学は参加する方法を提供してくれる」のだと述べている。英語という科目も中学生が受ける幅広い教育の一部であり、教育の本質は人間として自立し成長することを助けるものであるならば、英語の教材として読む素材も彼らの態度の形成や物事の認識に何らかの影響を与え、それに基づいた行動を促すようなものであることが望ましい。それゆえ彼らが英語を習得する過程で、自分と同じ年代の子どもたちを主人公にすえて、国や人種の枠を超えた人間にとって普遍的なテーマを扱っている海外の児童文学を読むことは、彼らの想像力を伸ばし、視野を広げ、そして共感する心を育て、やがて彼らが国際社会の一員となることを助け

ることにつながる。そこで、中学生は具体的にどのようなテーマの作品から得るものがあるかを考えるために、現在彼らが置かれている状況を確認しておこう。

中学生は発達心理学的に児童期から青年期へという人間のライフサイクルの中の大きな節目の段階にあり、その後22歳頃まで続くいわゆる思春期の前期に位置づけられる。この時期には第二次性徴が見られ身体的には成熟していく一方で、心理的には自己同一性の確立を模索しながら思春期特有のさまざまな悩みを抱えている。

2004年度版の『子ども白書』によると、登校拒否児が全国で13万人を超え、自尊感情の低い子どもたちが増加しているという。また1980年代から電子映像メディアとの関わりが指摘されている日本の子どもたちの「発育不全」、つまり身体や心の発達の遅れや歪みが更に深刻化し、2004年2月には日本小児科医会が「子どもとメディアの問題に対する提言」を発表するに至っている。インターネットを媒介とした事件に子どもが巻き込まれるケースや大人による子どもの虐待も大きな社会問題になっている。このように今を生きる中学生は思春期という心と体のバランスが崩れる最も不安定な時期に、多くのメディアからの情報が氾濫する中で将来に対する明るい希望も持てずにいる。物質的には今までの世代とは比べ物にならないほど恵まれた時代に育ちながらも、精神的には空虚で十分に満たされていない現代の若者の置かれた状況について、清水（1999：205-6）は「戦争を生きのびることも困難だけれど、平和を生きのびるのは、それよりもっと困難なことかもしれない」と述べている。

まさに子どもたちは危機的状況の中にあるわけだが、中学生にとってはアイデンティティーの確立がやはり最大の課題であると思われる。自分と

は何かという自己の発見や成長をテーマとした作品から彼らが得るものは大きいに違いない。また、子どもの自殺、殺人、校内暴力、いじめといった荒廃の影には生命の尊さに対する認識の欠如があると考えられる。人間も自然の一部であり、その循環の中で生かされている存在であることを示す自然をテーマとした作品や、若い自分たちとは対極にある老人をテーマとした作品も生命について考えるのに良い材料となるだろう。

(4) 問題点

ここまでは英語で書かれた絵本・児童文学を中学校の英語教育に導入することのプラス面を見てきたが、問題点についても触れておく必要がある。

教科書を中心に授業を進める教育現場において、補助教材の一部として絵本や物語を利用するという状況では、実際に取り上げることのできる作品の数はかなり限られたものになってしまう。そこで、生徒の学習状況に応じて、教科書の内容になるべく関連した素材を3つの基準、すなわち言語習得、異文化理解、文学的価値に照らして厳選し、効果的に利用するようにしなければならない。しかし、これら3つの基準をすべてクリアーするような作品であっても、授業で読むには長すぎるものもある。更に、異文化理解と文学的価値の観点からは得るものが大きいと判断される作品であっても、くだけた口語表現や中学校では習わない語彙が多すぎるなどといった主に言語上の問題のために中学生には難しすぎる作品もある。このように、素材の選択の幅を狭める要素が存在することが第一の問題点である。

この問題を解決するためにはどうしたらよいだろうか。ひとつには、授業外の時間を活用することが考えられる。授業時間内に読み終えようとするとどうしても時間的に制限されてしまうが、放課後や週末、長期休暇な

ど生徒が自由に使える時間に読むことを勧めることによって、使える作品の数を増やすことができる。また、長すぎる作品に関しては、授業で一章または一部を導入的に取り上げ、続きは課題として家で読ませるという方法をとれば、ただ単に長い作品だからという理由で使える本のリストからはずす必要がなくなる。ただし、この場合には生徒の自習の効率を上げるために、中学校では習わない語句や異文化理解の点で説明が必要な箇所の注を用意して配布するなどの配慮が必要である。

もう一つの解決法は、日本語に翻訳されているものがあれば、その翻訳書を利用することである。中学生のレベルでは語彙や文法の知識が限られているので、英語が難しすぎる場合はリーディング教材として適切ではない。しかし、もしその作品が異文化について学ぶことができる要素を多く含んでいたり、文学として中学生に関心のあるテーマを扱っているのであれば、翻訳書を読書案内的に紹介することも意義があるのではないだろうか。

以上をまとめると、中学生が英語の授業を通して英語圏の絵本・児童文学に接する方法としては、(1) 授業中に作品全体を英語で読む、(2) 授業中に作品の一部を英語で読み、残りは授業時間外に英語または翻訳書で読む、(3) 授業中に紹介された作品を授業時間外に翻訳書で読む、の3つが考えられる。

2つ目の問題点は、原作のまま一切手を加えずに中学生が読むことができる作品とその内容とのギャップである。つまり、中学生であれば日本語なら大人の文学も読み始める年代ではあるが、英語学習者としては初級なので、彼らの英語力で無理なく読める絵本や児童文学は彼らよりも年齢の低い子どもたちを対象に書かれたものが多いということだ。たと言語習得の面からは中学生の語彙や文法知識のレベルに合致しているものであっ

ても、内容的に幼児や児童が主に楽しめるような本では中学生はあまり魅力を感じないであろう。そこで、素材を選択する時には幼い子どもにも理解できる英語で書かれていても、年齢を問わずに訴えかける普遍的なテーマを扱っている作品であるかどうかを見極める必要がある。

これらの問題点に留意しながら、リーディング用の補助教材として利用可能な作品について、イギリス・アメリカの本を中心に童謡、昔話、絵本および短編小説のジャンル毎に探してみたい。

V. 絵本・児童文学からのリーディング用補助教材の選択

(1) 童謡

英語圏の子どもたちが親や周囲の大人たちに歌ってもらうことによって自然に覚え、長い年月にわたって親から子へと歌い継がれてきたのがマザー・グースとかナーサリー・ライムと呼ばれる童謡である。ほんの2行程度の短い歌から積み上げ歌まで長さはさまざまであるが、押韻によって口ずさみ易い歌が多いので、中学校1年生から導入して発音やリズムの練習に応用できる。

英語の童謡集は主に絵本の形で多数出版されているが、できればCDやDVD等の視聴覚教材とセットになっているものを使用する方が効果的である。実際に耳で聞いて覚えることができるし、遊びをしながら歌う童謡であれば、子どもたちがどのような動作をしながら歌うのかを観察することができるからである。

童謡はどれもそれほど長くはないので授業の中で一つずつ、あるいはいくつかまとめて読むことができる。取り上げる歌を選択するときの基準は、英語圏の子どもたちに人気があり、よく引用されたりする有名な歌を中心

に選ぶのが良い。そのような歌がどれであるかは、複数の童謡集に重複して掲載されているということが一つの目安になる。そのほかにも、異文化理解のための素材となる、その童謡の背景にまつわる興味深いエピソードがあるもの、絵本の場合は挿絵が歌の内容理解を助けるように描かれているかどうか、そして何よりも楽しく音読したり、歌ったりすることができるかどうかを選択の際の基準となる。

次にどのような童謡がこれらの基準を満たしているかということ、短いものでは *Rain, rain, go away*、なぞなぞ歌として『鏡の国のアリス』にも登場する *Humpty Dumpty*、「おばあさん」ものの中でも人気が高い *There was an old woman who lived in a shoe*、ナンセンスの歌として有名な *Hey diddle diddle*、早口言葉の *Peter Piper picked a peck of pickled pepper* などがある。

もう少し長めのものでは、*This is the house that Jack built* の1行から始まり、それに1行ずつ新しい文が加わって最後には11行の歌になる積み上げ歌は、頭韻や脚韻が多く発音や英語特有のリズムの練習教材としても適している。またハバードおばさんと犬の喜劇が物語のような歌になっている *Old Mother Hubbard* も人気のある童謡で、第1スタンザ以外は2行目と4行目が脚韻を踏む形式になっている。この歌は本によっていくつかの異なるバリエーションがあるが最初と最後はたいてい同じである。

それから、子どもたちが数を数えたり、遊びをしたりしながら歌うメロディーのついた童謡では、復活祭の前の聖金曜日に食べる習慣のある十字の印のついた菓子パンの歌、*Hot cross buns* や、中世に大流行したペストとの関連が指摘されている *Ring-a-ring o'roses*、数え歌の *One, two, three, four, five* などのほか、日本の子どもたちにも親しまれているものとして *Mary had a little lamb*、*Twinkle, twinkle, little star*、*London*

Bridge の歌がある。

このような歌を授業で学習した後、興味のある学習者には入手可能な英語の童謡集を紹介して他の童謡を英語で読むことを勧めることもできるし、あるいは英語と日本語の翻訳が両方載っている本も出版されているので、中学生にはむしろこちらの方が読みやすいかもしれない。

(2) 民話・昔話

民話や昔話も民間伝承という形で代々語り継がれてきたもので、これらには一定のパターンがあり、リフレインが多用されるのが特徴である。日本ではイギリス、ドイツ、フランス、北欧などの民話が翻訳されていて、それらはすでに日本の子どもたちの文化の一部になっている。中学生が幼児期に読んでもらったり、自分で読んだりして内容をよく知っている民話や昔話を今度は英語で読んでみるという試みは、全く未知の物語に挑戦するのと違って安心感があり、英語を読む自信をつけることができるというメリットがある。そして民話は細かい人物描写や状況説明を省いてアクションを中心に話が展開し、繰り返しの表現が頻繁に使われるため、その部分がより鮮明に記憶に残って語句の定着率も高くなる。

イギリスに昔から伝わる民話を集めた本としては Jacobs (1890) の *English Fairy Tales* と、同じく Jacobs (1894) の *More English Fairy Tales* があり、この2冊を1冊にまとめたものも出版されている。日本の子どもたちにも親しまれている『3びきの子ぶた』や『ジャックと豆の木』の話などがこの中に収められている。昔話の本なので多少古風な表現が見られるが、英語のリーディング用教材としてそのまま問題なく使用できる。また Jacobs の本を基にして多くの昔話絵本が出版されているので、それらの絵本を利用することも可能である。イギリスではもう一人

Lang (1889) が *The Blue Fairy Book* に始まる12冊の『色の童話集』を出している。Lang のシリーズにはイギリスの昔話ばかりでなく、広くヨーロッパを起源としたもの、ロシア、アフリカ、日本などの話も含まれている。*The Blue Fairy Book* の新版が Alderson (1975) によって出版されている。

アメリカの Haviland (1972) は世界の有名な昔話32編を選んで *The Fairy Tale Treasury* として編集し、ブリッグズの挿絵入りで出版している。この中にはドイツのグリム兄弟によって採録された『おおかみと七ひきの子やぎ』や『金のがちょう』、ノルウェーのアスピョルンセンとモーによって再話された『三びきのやぎのがらがらどん』、日本の『一寸ぼうし』の話も入っている。

このように Lang や Haviland のような民話集にはいくつかの国や地域の話が収められているので、一冊で世界のさまざまな国の民話を読むことができるという利点がある。もちろん有名な昔話は単独で絵本になっているので、何冊か選択して読むこともできる。例えば、シンデレラ系の昔話が国によってどのようなバリエーションで語られているかをペローの『シンデレラ』(フランス)、グリム兄弟の『灰かぶり』(ドイツ)、ジェイコブズの『いぐさ姫』(イギリス) で読み比べてみるという方法もある。また、アメリカの挿絵画家 Brown は海外の昔話を自ら再話または翻訳して多数の昔話絵本を作り、コールデコット賞を受賞している。例えば、*Once a Mouse* (Brown, 1961) はインドの昔話をベースにした短い話である。長めのものでは *Stone Soup* (Brown, 1947) と *Dick Whittington and His Cat* (Brown, 1950) がそれぞれフランスとイギリスの民話を再話したものである。

民話・昔話をリーディング用補助教材として使用するときには、当然の

ことながら1年生用には日本の子どもに親しみのある短い話から始め、学年が上がるにつれて日本ではあまり知られていない長めの話を選ぶようにすることと、一つの国や地域の話に片寄らないようにバランスに配慮する必要がある。興味のある学習者には教室外でも民話や昔話はなるべく英語で読むように勧めたい。

(3) その他の絵本・児童文学

次に現代の創作物語について絵本と児童文学の中から中学生用のリーディング補助教材として利用できる作品を探してみよう。絵本については自然とアイデンティティーの追求という2つのテーマを中心に、児童文学はイギリスとアメリカを代表する児童文学作家の短編集の中から一つずつ作品を取り上げて述べることにする。

まず自然・環境をテーマとして扱った絵本として Udry と Simont (1956) の *A Tree is Nice* は、簡潔な英語で季節ごとに木をめぐるさまざまな自然現象や木と人間の共生を語り、物語の最後で自ら木を植えるという行動をとることによって、自主的に自然や環境の保護に関わっていかうとする姿勢を呼びかける。Hall と Cooney (1979) の *Ox-Cart Man* はアメリカの農場に住む家族を主人公にして季節の移り変わりの中で日々繰り返される生活の営みと、家族が力を合わせて働く姿を描いた作品である。Hall の文は所々にレフレインや頭韻、脚韻をちりばめ詩のような快いリズムを醸し出している。本格的な物語絵本では Burton (1942) の *The Little House* があり、この本では文の配置が絵の一部となって美しく一体化している。この作品は時の流れと共に変わりゆく自然と昔のまま変化しない古い家を対比させ、社会の進歩が自然環境の破壊を招き、古いものが疎外され顧みられなくなることへの警鐘を鳴らしている。これはアメリカ

を舞台にした作品ではあるが、人間が歩んできた歴史の一部であり、出版から60年以上を経た今でも現代性を持ち続けている。

アイデンティティーの問題を扱った絵本では、日本の子どもたちにも翻訳書で親しまれている Lionni (1959) の *Little Blue and Little Yellow* がまず挙げられる。これは表面的には就学前の子どもを対象に書かれたやさしい本であるが、思春期の子どもが必ず直面する「自分とは何か」という根源的な問いがテーマとなっている奥の深い絵本である。青と黄色という二つの別個な人格が混じり合うことによって緑という新しい人格が生まれるが、それが両親にさえ我が子として認めてもらえない悲しみを乗り越えて、それぞれが自己認識に至る様子がちぎりで抽象的に表現されている。もう一人 Silverstein (1976, 1981) も *The Missing Piece* と *The Missing Piece Meets the Big O* で二種類の抽象的な「形」を主人公として登場させ、ユニークな自分探しの旅を描いている。前者では一部が欠けた円形が主人公で、自分の欠けた部分にぴったり合う相手を探し求めてころころと回転しながら遍歴の旅に出るが、いざ望みがかなって自分が完全な円形になったと思った瞬間に思わぬ落とし穴があり、結局はもとの欠けたままの自分に戻って自己を取り戻すという話である。後者は鋭くとがった二等辺三角形が主人公で、自分は回転して移動することができないと思ひ込み、欠けた部分のある他者に依存することによって何とか移動したいと考え、通りすがりのさまざまな相手にトライしてみるがどれもうまくいかない。ある日ビッグ・オーという完全な円と出会い、痛みを伴いながらも自力で回転することを覚え、自分の存在に目覚める物語である。テーマは違うが、Silverstein (1964) の *The Giving Tree* も中学生用のリーディング教材として適切である。

次に短編小説ではイギリスの Pearce (1977) の短編集 *What the Neighbours Did and Other Stories* に収められている作品のひとつ “Return to Air” は1500語程度の短いストーリーである。これはイギリスの小学校でもテキストとして使用される頻度の高い成長物語で、ソーセージというあだ名の少女が初めて池でアヒルもぐりをして目標物を取ってきた時の経験を一人称で語っている。彼女は水泳のインストラクターに水底から取ってくるように言われたレンガではなく、泥の詰まったスズ製のお弁当箱を取ってくるが、恐怖を克服して初めて水底まで潜ったことが彼女にとっては、Hollindale (1997) の言う「エピファニー」(epiphany)、つまり成長の節目となる重要な体験で、その喜びが古いお弁当箱に大切なコインのコレクションを入れてマントルピースに飾るという行動で表されている。

この作品の中には日本の子どもたちにとって不思議に思うことがいくつもあるに違いない。例えば、インストラクターが水中に投じるのはなぜいつもレンガなのか、ソーセージが古いお弁当箱の中にしまったのはなぜコインのコレクションなのか、そして、彼女はなぜそれをマントルピースの上に置いたのか、といったことである。これらの疑問に対する答えの中にイギリスの文化を理解するためのいくつかの手がかりが隠されている。

アメリカの作家 Konigsburg (1971) の *Altogether, One at a Time* は四篇の作品から成る短編集で、その中の “The Night of the Leonids” は老・若のテーマを扱っている。ニューヨークのセントラルパークで60代の祖母と10歳の孫が33年に一度しか見ることのできない壮大な流星群と一緒に見物するという話である。少年は次にこの夜空のショーを見るときには自分が中年になってしまうと言って泣くが、祖母にはもう次のチャンスはないことを悟り、いつもはクールな関係を保っている二人が手をつない

で帰宅するのである。悠久の時の流れの中でほんの一瞬、死にゆく老人とこれから成長していく子どもが同じ時を共有することによって生じた、お互いへの慈しみの気持ちがさりげなく描かれている。

日本の子どもたちはこの作品を通してアメリカの中産階級の人々の家族のあり方を垣間見ることができる。お互いがある程度の距離を保ちつつ、支えが必要な時には助け合って暖かい人間関係を維持していこうとする。そして、「自立」がアメリカ人にとって重要な価値基準であることも一人暮らしの祖母の姿は物語っている。

以上、リーディング用補助教材として適切な作品の具体例をイギリスとアメリカの絵本を中心にほんの一部しか挙げることができなかったが、他の英語圏の本のリストも必要であるし、またそのような本のリストは定期的にアップデートさせていかなければならない。

VI. おわりに

本稿では中学校の英語教育に限定して、言語習得、異文化理解および文学的価値の観点から英語圏の絵本と児童文学の有用性を考察した。リーディング用補助教材の選択にあたっては、まず語彙や文法、ストーリーの長さといった言語面での基準をクリアーした上で、その作品の中には異文化理解を助けるどのような要素が含まれているか、そして中学生が彼らの成長過程において読む意義のあるテーマを扱った文学的に価値のある作品であるかどうかを考慮する必要がある。そのようにして厳選された作品を原書で読むことは、中学生が質の高い自然な英語を媒体として英語を読む力をつけるとともに、英語圏を中心とした世界の人々や文化に対する洞察力を養い、共感や感動体験を通して彼らが人間として成長するのを助けるこ

とにつながる。高等学校における英語学習への橋渡しという意味でも、中学生の時からたとえ短いものであっても原書に親しむ機会を持つことは重要であると思われる。

参考文献

文部省 (1998)、『中学校学習指導要領』、東京：財務省印刷局。

<中学校検定済み英語教科書：2002年発行>

Columbus 21 English Course. 光村図書。

New Crown English Series. 三省堂。

New Horizon English Course. 東京書籍。

One World English Course New Edition. 教育出版。

Sunshine English Course. 開隆堂。

Total Active. Comm. 秀文館。

Total English New Edition. 学校図書。

<辞書>

小西友七・南出康世 (2001)、『ジーニアス英和辞典第3版』、東京：大修館。

Bassnet, S. & Grundy, P. (1993). Language Through Literature. London: Longman.

Brooks, N. (1964). Language and Language Learning: Theory and Practice. New York: Harcourt, Brace & World.

Brooks, N. (1968). Teaching Culture in the Foreign Language Classroom. Foreign Language Annals 1. 204-217.

Byram, M. (1989). Cultural Studies in Foreign Language Education. Avon: Multilingual Matters.

Chambers, A. (1983). Introducing Books to Children: 2nd edition. Boston: Horn Book.

- Collie, J. & Slater, S. (1987). Literature in the Language Classroom: A resource book of ideas and activities. Cambridge: Cambridge University Press.
- Egoff, S. et al (eds.) (1980). Only Connect : 2nd edition. Toront: Oxford University Press.
- 絵本・児童文学研究センター編 (2002)、『基礎講座資料集 改訂版2 TEXT 2』、小樽：絵本・児童文学研究センター。
- Ghosn, I. K. (2002). Four Good Reasons to Use Literature in Primary School ELT. ELT Journal. 56 (2), 172-179.
- Hazard, P. (1947). Books, Children and Men. Boston: Horn Book.
- Hill, J. (1986). Using Literature in Language Teaching. London: Macmillan.
- Ho, L. (2000). Children's Literature in Adult Education. Children's Literature in Education. 31 (4), 259-271.
- Hollindale, P. (1997). Signs of Childness in Children's Books. London: Thimble Press.
- 小池生夫 (1994)、『異文化理解を視点に入れた外国語教育』、『異文化間教育』第8号 22-33、京都：アカデミア出版会。
- McKay, S. (1982). Literature in the ESL Classroom. TESOL Quarterly. 16 (4): 529-536.
- Marquardt, W. (1967). Literature and Cross-Cultural Communication in the Course in English for International Students. Florida FL Reporter. 5 (2) : 9.
- 日本子どもを守る会編 (2004)、『子ども白書2004』、東京：草土文化。
- Nostrand, F. & Nostrand, H. L. (1970). Testing Understanding of the Foreign Culture. In H. N. Seelye (ed.) Perspectives for Teachers of Latin American Culture. Springfield, Ill.: Superintendent of Public Instruction.
- Rönngvist, L. & Sell, R. D. (1994). Teenage Books for Teenagers: Reflections on Literature in Language Education. ELT Journal. 48 (2), 125-132.
- Seelye, H. N. (1974). Teaching Culture: Strategies for Foreign Language Educators. Skokie, Ill.: National Textbook Co.
- 清水真砂子 (1999)、『学生が輝くとき』、東京：岩波書店。
- Smith, L. H. (1953). The Unreluctant Years. Chicago: American Library Association.
- Townsend, J. R. (1996). Written for Children: 6th American edition. Lanham, Md.: Scarecrow Press.
- Valdes, J. M. (1986). Culture Bound: Bridging the cultural gap in language teaching.

Cambridge: Cambridge University Press.

<絵本・児童文学>

- Brown, Marcia (1947). *Stone Soup*. Aladdin Paperbooks.
- Brown, Marcia (1950). *Dick Whittington and His Cat*. Atheneum.
- Brown, Marcia (1961). *Once a Mouse*. Aladdin Paperbooks.
- Burton, Virginia Lee (1942). *The Little House*. Houghton Mifflin.
- Buscaglia, Leo (1982). *The Fall of Freddie the Leaf*. SLACK.
- Hall, Donald & Cooney, Barbara (1979). *Ox-Cart Man*. Viking Press.
- Haviland, Virginia (1972). *The Fairy Tale Treasury*. Hamilton.
- Jacobs, Joseph (1890). *English Fairy Tales*.
- Jacobs, Joseph (1894). *More English Fairy Tales*.
- Konigsburg, E. L. (1971). *Altogether, One at a Time*. Atheneum.
- Lang, Andrew (1889). *The Blue Fairy Book*.
- Lang, Andrew (1975) new edn., rev. Alderson, Brian. *The Blue Fairy Book*.
- Leoni, Leo (1959). *Little Blue and Little Yellow*. Ivan Obolensky.
- Pearce, Philippa (1972). *What the Neighbours Did and Other Stories*. Longman.
- Silverstein, Shel (1964). *The Giving Tree*. HarperCollins.
- Silverstein, Shel (1976). *The Missing Piece*. HarperCollins.
- Silverstein, Shel (1981). *The Missing Piece Meets the Big O*. HarperCollins.
- Udry, Janice May & Simont, Marc (1956). *A Tree is Nice*. Harper & Row.